

日本
ポルタリス
文学大系

7

小田切秀雄 野間宏 竹内 好

日本加列了文学大系

7

弾圧と解体の時代 下

文化連盟の成立から中日戦争の開始

三一書房

日本プロレタリア文学大系 7 定価一五〇〇円

一九五五年四月三十日 第一版発行
一九六九年七月三十一日 第二刷発行

編者代表 野間 宏

発行者 竹村 一

発行所 株式會社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三二三一・五
振替東京 八四一六〇番

郵便番号 一〇六一

印刷 文栄印刷株式會社
製本 有限會社 佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

● 1955年

全9巻 第8回配本

第七卷

「弾圧と解体の時代」
(下)

凡 例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によつて校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねものとすとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によつたが、ときに執筆年月によつて配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、奥林一石路の両氏に協力をおおいだ。

第七卷 目 次

I 小 説

釜	ガ 崎		武田麟太郎	三
今	日 様		葉山嘉樹	二〇
劇	場		村山知義	四〇
風	雲		窪川鶴次郎	九
乳	房		宮本百合子	二五
鈴木・都山・八十島			中野重治	一四
鶏飼いのコムニスト			平林彪吾	一六
人生のいり口			江口 渙	一八
夕 焼 の 窓			間宮茂輔	二六
嗚呼いやなことだ			高見 順	三〇
彼 岸			徳永 直	三四
綴方教室抄			豊田 正子	三六
友 情			立野 信之	三七

Ⅱ 評 論

「文学者に就て」について.....	中 野 重 治……三〇
創作方法と芸術家の世界観.....	森 山 啓……三七
作家同盟の解散.....	江 口 渙……三〇
社会主義的リアリズムか！ 日和見主義的リアリズムか！.....	伊 藤 貞 助……三八
否定的リアリズムについて.....	川 口 浩……三七
プロレタリア文学とナルプの功罪.....	山 田 清 三 郎……三五
政治と文学について.....	亀 井 勝 一 郎……三〇
冬を越す 蕾.....	宮 本 百 合 子……三七
創作方法と世界観との相互浸透.....	甘 粕 石 介……三三
社会主義リアリズムと革命的（反資本主義）リアリズム.....	久 保 栄……三九
国際反ファシズム文化運動.....	新 村 猛……三三
認識論としての文芸学.....	戸 坂 潤……三八
「日本文芸学」批判.....	本 間 唯 一……四六
日本国民文学の確立.....	高 倉 テ ル……四五

Ⅲ 詩・短歌・俳句

詩

春を告ぐるモスクワ河の流氷	秋田雨雀	四一
燈台	金子光晴	四四
しゃべり捲くれ	小熊秀雄	四六
ヴォルガ河のために	小熊秀雄	四七
鶯の歌	小熊秀雄	四九
伏字	さかい・とくぞう	四九
青酸カリ時代	さかい・とくぞう	四九
英語ざらい	壺井繁治	五一
横光利一の洋行	遠地輝武	五三
朝へ行く	平林彪吾	五三
鋌打工	田木繁	五四
鋸	田木繁	五四
極めて家庭的に	木村好子	五五
河	北川冬彦	五五
稲作挿話	宮沢賢治	五七
もうろくずきん	萩原恭次郎	五九

コップ酒屋にいる男の群

ふるさとへの歌

船底修理

サガレンの浮浪者

鉄骨工事場

浜辺

走れ！ トロッコ

陳述

アディスアベバの老母

空は赤く焼けて

第十六回メーデー

あゝる朝

短歌

旧作

風船はり

死んだ同志

貧農の唄

病床

工場から

伊藤和 四〇

舟方一 四二

松永浩介 四三

広海太治 四四

大元清二郎 四六

鈴木浅五郎 四九

赤石茂 五二

神保光太郎 五三

大江満雄 五四

植村諦 五五

秋山清 五七

秋山清 五八

川崎むつを 六〇

矢代東村 六〇

和沢昌治 六一

萩原大助 六一

石井光 六一

岡村浄一郎 六二

鉄錠の音……………	大沢久明……………四三
橋梁舗装工事……………	青江竜樹……………四三
京浜工場地帯……………	渡辺順三……………四三
海猫によせて……………	坪野哲久……………四四
南葛の空……………	渡辺順三……………四四
国境の町……………	速水惣一郎……………四五
冬と春……………	赤木健介……………四六
網走……………	津村駿……………四六
面会……………	中島亮子……………四七
職場の歌……………	水原蓮……………四七
生活から……………	小原猛雄……………四八
鞭に抗する……………	西原正春……………四八
労働抄……………	後藤順一郎……………四九
兵營生活回想……………	剛一志……………四九
鉄路に唄う……………	福島和人……………四九
一九三六・五・一……………	佐藤吉之助……………四九
雷雨……………	南竜夫……………五〇
独房集……………	鍋井利……………五一
市井事……………	梅田順二……………五一

朝
俳

句
霧

萩原大助……四九三

橋本夢道……四九三

栗林一石路……四九四

神代藤平……四九五

横山林二……四九六

林冬二……四九六

田秋泉……四九七

山中順……四九八

すずき・ゆきひと……四九九

三浦成一郎……四九九

斎藤武男……四九九

小山一平……五〇〇

樺口赤子……五〇〇

浜口弥十郎……五〇〇

伴栄……五〇一

市木千尋……五〇一

中村怒濤……五〇一

新井夜雨……五〇三

山	信	殿	軌	斎	百	清	柳	黒	木	横	水	山	柳	登	伊	北	井	清
村	濃	村	道	藤	瀬	水	田	崎	島	山	野	口	京	死	藤	原	形	内
雪	馬	兵	閃	繼	菜	源	千	草	青	梨	敏	羊	次	男	棒	良	春	路
夫	一	衛	子	子	穂	恵	矢	生	天	郎	仙	三	三	三	地	子	一	二
五	五	五	五	四	四	五	四	四	四	四	三	三	三	三	三	五	五	五

年 解

説

表 (一九三四・四) 一九三七・六)

日本近代文学研究所編

五七

岸田 椋 十	五五
大蔵 宏 之	五五
一瀬 鉄 平	五六
石橋 辰之助	五六
石田 波 郷	五六
東 京 三	五七
古 家 樞 夫	五七
藤 田 初 己	五七
富沢 赤黄男	五八
篠 原 鳳 作	五八
加 藤 楸 邨	五九
中村 草 田 男	五九
ひろし・ぬやま	六〇
江 口 渙	六一
野 間 宏	五三

I
小
説

釜 崎

武田 麟太郎

カッテ、幾人カノ外来者ガ、案内者ナクシテ、コノ密集地域ノ奥深く迷イ込ミ、ソノママ行先不明トナリシ事ノアリシト聞ク——このように、ある大阪地誌に下手な文章で結論されている釜崎は「ガード下」の通称があるように、恵美須町市電車庫の南、関西線のガードを起点としているのであるが、さすがその表通は、紀州街道に沿っている皮肉にも住吉堺あたりの物持が自動車で往き来するので、幅広く整理され、今はアスファルトさえ敷かれています。それでも矢張り他の町通と区別されるのは五十何軒もある木賃宿が、その間に煮込屋、安酒場、めし屋、古道具屋、紹介屋などを織込んで、陰鬱に立列んでいるのと、一帯に強烈な臭気が——人間の臓物が腐敗して行く臭気が流れていることであらう。

一九三二年の冬の夜、小さな和服姿の「外来者」が唯一人でこの表通を南の方へ歩いてた。冷たい雨が降って、彼

のコーモリ傘を握った指先も凍って痺れているのに、別にここで宿を求めるでもなく、人を訪ねるけしきもなく、ゆっくりとした足どりであったが——その様子を、家の軒端に立って、今まで首巻代りにしていた手拭で頬被りし、腕組んでいる宿なしたちも別に注意しなかったし、交番所の年とった巡査も怪しまなかったところを見ると、その外来者は、この土地に適した顔かたちをしているのだらう。そう云えば、実は彼は東京に住む小説家であるが、批評家たちがいつでも口癖のように「彼にはルンペン性があつて、どうもよくない」と眉をしかめているのも思い当るふしがないでもない。——しかし、彼はこの寒さに何の気紛れもなして、あんなに物思いに沈んだ表情でこの地帯を行くのかと、人は問うかも知れぬ。それは過去をなつかしむ感情に駆られた結果である。と云うのは、彼はこの街で生れ十二まで育つたのであるが、ほんの三日前、ここで彼を手塩にかけて大きくした母親が急死し、その追憶の念が彼の足を知らぬうちに、こちらへと向けさせたわけである。もとより彼はまだ年少で、自分の激情を制するすべもわきまえぬ男故、要もないかうした夜歩きや感傷癖を許してやってもよいだらう。

すでに、街から醗酵する特殊な臭いは聯想作用を起して、彼の胸に種々な過去の情景を浮びあがらせ、彼はそれに簡単に陶醉して了っていたので、その尖っている眼もいつに似ず柔和に光り、何も見えていないに近かったのであ

る。唯、去来する思いが——たとえば、袋物工場に通っていた母親が、夜も休まず石油の空箱を台にして（その箱の隅には小さな蜘蛛が綿屑みたいな巣をかけていた！）セルロイド櫛に、小さな金具の飾をピンセットで挟み、アラビヤゴムと云う西洋の糊でつける仕事をしている横に、新聞紙にくるんだ芋が置かれてある有様や、そして、その芋は彼女の夕飯代りなのだが、夜更けると子供たちが腹をすかせるので、彼女は大半を残して置き、子供たちがせびると「何云うねん、こらおかんのや」と云いながらも分けてやり、または、その飾附けの出来あがった櫛を十歳の少年である彼と共に大きな重い風呂敷包にして、大国町の問屋に運ぶ時の手だるさやら、そんな稼ぎものの彼女にも係らず、ある夜は鴉金屋の親爺に罵られて（彼が今にいたるまで鴉金の名称を忘れずにいるとは何と云う因果なことである）。それは朝貸出した金が夕方には利子をくわえて元の巢へ飛戻って来る——鴉のように、と云うので、そう呼ばれていた。一円を借入れると、先ず十銭は天引、手取は九十銭であるが、その後一円の五歩の利息を加えて、八日間に返済しなければならぬ。彼女はしかたなく、片隅に積んであった小便臭い家族たちの蒲団を頭にかついで外へ出て行くと、その頃流通していた十銭紙幣の油じみたのを持って帰って来たが、その夜の明け方の寒さやら、或はぐうたらな遊び好きの少年であった彼が、尾上松之助の俠客物が見たくて、彼女に嘘をつき金をねだり、すると彼女はまた

思い余って、巻いていた帯を解いて緋の前掛だけになり——帯は彼の入場料になって、彼は活動写真に感激した余り、二階の上りっぱなの壁に、墨で以て、眇眼の尾上松之助の似顔絵を大きく書いたり——

妙なもので、遠い以前の習慣を、足は忘れずに思い出したものか、無意識にふと立ちどまり、そこで小説家ははっとして眼を転じるならば、ちょうど彼が生れて育った家の、路地先まで来ているのであった。雨にベタバタに濡れて光る浪花節のポスターが、床屋の表にぶらさがっているが、その横を折れて二軒目がそうである。——この床屋も代が変わったであろう、彼はいつも小僧のために「虎刈」にされていた。今夜はもはや客がないと見え、ガラス戸を閉めて、白いカーテンを張りめぐらしてあるので、内らは覗けぬ。

路地に入ると暗がり、軒並みの家々の影も、永い年月が経っている故、古びて歪んでいるように思われ、しかもどこもとんと静かなのが、少し小説家にはよそよそしく感じられないでもなかったが、懐しい場所に再び立入ったことで、彼の気持はすっかり満足していた。——自分が十二年もいた家に、今は如何云う人が住み、如何云う生活がなされているかと、想像するのは、甘い楽しみであったから。

すると、彼はその家の戸口に女が出て来たのを認めたのである。それは恐らく、そこのお神さんで、外出しようとして